

Translation into English.

By M. Kyoto (5th Year.)

For success in affairs, it is essential that there, in mind, should be established a solid foundation of will concerning the means to be pursued. Reversely he who is in lack of the decisive will, will be unable to accomplish anything owing to the rambling perplexity of thought; just as a helmsless ship wandering her way here and there upon the boundless sheet of water. Further explanation may be better expressed by the proverb :—

“He who pursues two hares catches neither.”

No sooner had his will once been determined than it should be followed, with perseverance and assiduity pushing away any obstacles, till the effect makes its appearance.

It is the most valuable quality of him, that, the more failures he experiences, the more courageous his spirit becomes. On the contrary, a man whose spirit is immediately daunted by an accidental obstruction, sufficiently proves that his will had not yet been formed solidly.

(Translated from the Shogaku-sinshinkyō.)

◎新體詩

◎白雲微吟

第五年級 田中藤馬

高峯にのぼりてみれば
神風はたもとにふけど

天の原はてこそなけれ
唯一人せんすべしらに。

ぬば玉の夜のとばりよ
大空をながるゝほしは

つゝなれて國土^{クニヂ}はみぬす
天乙女のせて行くらむ。

紫のくものあなたゆ
朝くらやかなでゝゐます

調こそかすかにひいけ
ゆふつくるかきあはすらし。

うつゝとも夢ともわかで
天の川色かつさねて

あはつかまかへりみすれば
夜は深く谷の面くらし。

荒鷺のすがたもみぬす
むかつをの雲間の内に

天かける龍てふ神も
今しばしうなるやすらむ。

秋の夜のやまのしづけさ

音絶えてあやめもわかず

おのづから涙もそひて

現身のそれもわすれて
遠方をはるくみれば

立ちのぼるさ霧の下に
玉ぼこの道あるくには
天地のすがた戀ひしも

◎須磨の浦

よせてはかへす白波も
島かげかろく行く船も

過ぎし古をなつかしみ
たれこゝもとに須磨の浦

ありしさかぬの夢のあと
年まだ若き尼僧の

つゆしげく肌はさむし。

空にこそ心はかけれ
おぼろげに燈火みゆる。

生れてし我世はあるを
其下にくちぬおもへば
どこよたのしも。

同上

幾世の夢やさすすらむ
思は多きながめかな。

真砂地遠くきてみれば
ふるきみ寺はあはれて。

かたみの笛を共にみて
ゆはれ語るも涙かな。

櫻ごちりしものゝふの
しばし休らひ給ひけむ

をゝき心は鐵かひの
稻妻青くきゆるとき

萬世までも二つなき
紫にほふふでのあと

富もさかぬもうき雲の
何をよぶらむ子規

◎命を守れ

命まもるは國の爲め、
光りかゝやく日の本の、
山なす黄金^{コガネ}ありとても、
命あらずば如何にせむ、

花の首^{シルシ}をあらためて
松は今猶みどりにて。

峯よりおろす夜半の風
彼處よさびし墓の影。

名にこそこのこれ一の谷
源氏のきみも忍ばれて。

はかなき影をなかむれば、
きぬ行く方やしな一つ。

第三年級 野村義雄

守るぞ人のつとめなる、
國の威光^{ミイツ}もいのちなり。
海なす財寶^{タカラ}ありとても、
命ありての寶なり。

忠勇無雙の武士が、
散るも勳をのこさんと、
一事をなして學生が、
命あらずばいかにせむ、

血汐に染みて紅葉ばの、
起す心もいのちなり。
富士の高きも麓にと、
命ありての業なり。

◎冬

第三年級 野村佐一郎

朝日の光羽にうけて
冬きにけりと知られけり
ひうけのかたを見渡せば
こがらし寒くひねかへり
池にはむすぶあつ氷
犬の足あとおもしろや
あつまる人のかずくを
鳥は野原にゑをあさり
あはれもあはれいかせん
こゝよつくれる人の形
さむさをしたふ夏の日も
むろの梅の木花さけど

とびゆく鳥のなくねにも
かれ草をよぐまきむぢの
みなしろたねの山のゆき
松に花さく朝ぼらげ
うすくつもれる初雪に
山べの里またつけむり
みればあはれな旅の人
罪なくあみにかゝりけり
かしこにきづく雪の山
冬のけしきをゑよかきて
思ひやられていとさむし
寒さかはらぬむつび月

◎海邊月

第三年級 中野爲藏

しま山かくれゆく舟の
家路をたどるふな人の
はるかまつく磯山の
光ようつらふさゝ波は
いそ吹く嵐いやつよく
押かへされつ又よせつ

白帆に風を含みつゝ
舟歌うたふ聲をかし
松の絶間に月いでゝ
黄金の色を流しけり
浪の鼓をうち立てゝ
碎けてさわぐ跡白し

◎旅中漫吟

第五年級 田中藤馬

大空をかけりてみまぐ越ねて來し山は錦のどはりせるかも
山姫のおれる錦はあともなし我歸り路は落葉のみして
鏡なす余吾の湖邊に矛杉の影さかさまにうつりたるみゆ
うら／＼このぼる朝日に余吾の湖の景色のこらす今あらはれぬ

(秋の山にのぼりて)

(同上)

(余吾湖をみてよめる)

(同上)

あれはてしふる卒塔婆をみながらもそれと知言はぬ我心あはれ
(大岩山にて中川清秀の墓のあれたるをみて)
 ものゝふの眠れる姿みせしとや大岩山に霧の立つらむ
(大岩山にて)
 久方の空を流るゝ天の川尾の上に落ちてさ霧となりぬ
(ある山里にてよめる)
 あさなきの波清らかに琵琶湖のたなゝし小舟眺めあかなく
(湖邊にて)
 天をゝる比良の神山白雲の矢走をさして湧き出つるみゆ
(あるさき)
 比叡の奥の日吉の社秋くれば朱の御垣に紅葉ちるかも
(日吉神社に詣てゝ)
 名にたかき七つの社神垣をみしはかりにて歸らく惜しも
(同上)
 奥山の古きみ寺は寂しくて黒きとひらに秋の風ふく
(延暦寺に詣てゝ)
 いたゞきはのこらすはれて比叡の山のみ寺をどさす法の白雲
(同上)

◎和歌七首

第四年級 下村紫朗

砂白く松は緑りの二見瀉磯うつ波のしほ合の橋
(しほ合橋上)
 東雲の霞一むら棚引きてはのかゝ見ゆる富士の芝山
(二見浦)
 神風は木蔭も清き五十鈴川暑さ流して涼しかりけり
(五十鈴川)
 加茂川に暑さを洗ふ雨すきて月をのせたる納涼船哉
(夜加茂川)
 生ひ茂る黄金の稻穂浪立ちて涼しき風の渡る夕暮
(野邊の夕)
 夕立の馳せて過ぎよし山の端に影さやかなる夏の夜の月
(京都にて)
 小波やしが大津を船出して見らくさやけき夏の夜の月
(湖上にて)

◎和歌七首

第四年級 橋本愼二

蚊遣火の烟にくもる月影は尾上の松にかゝりけるかな
(夏月)
 わが宿の庭の梢に蟬なきてたもとすしく朝風そふく
(折にふれて)
 暑さをも忘れかねしをつかの空に初秋しるくこほろきのなく
(初秋)
 暑さには人も吾身も倦みにけり垣ねに近くこほろきのなく
(立秋)
 わが庭に咲ける白菊匂ふなり軒端の月の影もうつりて
(白菊)
 月に雲花に嵐の世なれども千年に匂ふ白菊の花
(所感)
 さらぬたに憂きを習ひの秋なれと暮しかねたる夕暮の空
(秋夕)

◎芙蓉集

第四年級 松居源四郎

水汲みて桃の林を歸りくれば持ちし手桶は花散り浮きぬ
 狼の出づてふ山路一人行けば木枯寒し月くらくして
 吾庭の古井のそはの梅の花紅きは枯れて白少し咲く
 紫のにはへる色の衣着たる少女の袖に花散りかゝる
 霧はれて夕月にはふ畦道を牛追ふうなる笛吹きて行く

◎和歌四首

第三年級 野村佐一郎

つがのきのいやつき／＼にうつりゆく月日の早さ今日をしりける (みそによめる)
 あら玉の年のはじめのことぶきを歌ひてあそぶ今日ぞたのしき (新年)
 にはのうみあせていさごはみぬともそこひも知らぬめぐみ也梟 (舊師に送るまで)
 海山よささるばかりの恵をばわする、人のいかであるべき (同上)

◎春曙外拾首

第三年級 野村義雄

たぐひなきうみが恵のつゆにぬれ庭のすみれもけさ咲きにけり (菫)
 さくら花みるにつけても思ふかな散りてかへらぬ人のむかしを (寄花懷舊)
 くらき夜にひかりつ消ぬつ水の面に光すすしく飛ぶはたるかな (螢)
 やまふかみ訪ふ人もなき柴の戸は影さしいりぬあきの夜の月 (山家秋月)
 秋の夜をいしやまであら旅ねしてさやけき月をみるぞたのしき (石山にて)
 わがふでの及ばし書にもうつさまし松にかかれる月のけしきを (同上)
 もみぢする高野の山に分けいればにしきをさたるこゝちこそすれ (高野山にて)
 五月雨にぬれにぞぬるゝわが袖はまなびの親のけふのわかれに (師を送りて)
 荒れはてゝすむ人もなき古寺の軒端の松に蟬をなくなる (感慨)



◎彦根の由來

佐藤鍾太郎

彦根城は一に金龜城と稱す、井伊氏歴代の居城なり、
 井伊氏姓は藤原、其先は閑院左大臣冬嗣より出つ、
 冬嗣第七子を内舍人良門と曰ふ、良門五世の孫備中
 守其資の子は、遠江守共保と稱す、其後胤肥後守直
 親の子を兵部大輔直政と曰ふ、幼にして徳川家康に
 仕へ、遠江井伊谷の地を賜ひて、菅沼次郎右衛門元
 景、近藤石見守秀用、鈴木平兵衛重好は輔佐せらる、
 既長して寡言沈深、而して大事あるに臨んては、
 果決として智謀あり、苟も思ふ所あれば敢て言はざ
 るなし、是によりて大に家康に親任せられ、常に樞
 機に與らる、慶長五年九月關ヶ原の役起る、直政最
 も功あり、故を以て其十二月佐和山十八萬石と封せ
 らる、世に所謂徳川四天王の第一位に居る、翌年幕命
 を受け金龜山に城を築くや、功未だ竣らずして卒す、
 長子直勝嗣ぐ、八年七月家康其老臣木俣土佐を駿府
 に召し、命するは築城の事を以てし、旗下の士山城
 宮内少輔、佐久間河内守、大塚平右衛門を以て之を
 督せしむ、翌九年春より功を興し、十一年に至り城
 全く成る、其天主閣は大津城のものを移し、其城内
 松の間、櫻の間は、伏見桃山殿のものを取り、其黒
 書院、杜若の間、麥の間、居間書院は、佐和山より
 移したる者にして、當時使用したる人夫は、尾張、美
 濃、飛騨、越前、伊賀、伊勢、若狭の七國に命せられ
 たり、而して之を繩張する者は、其臣横地修理、石
 原主膳、孕石源右衛門、早川彌惣左衛門にして、普
 請奉行は則ち富上喜大夫、伴加右衛門、加藤金右衛門
 等となす、結構壯麗規模宏大、尤も堅城と稱す、其
 後幕府直勝の多病にして、軍國の務に堪へざるを以
 て、上野國安中(三石万)に移し、其弟直孝をして更
 は彦根城に封し、直政の後を襲かしむ、直孝英武絶
 倫、大坂の役功あり、故を以て封を増して三十五万

石とす、後ち十餘世安政年間掃部頭直弼實に幕府の元老たり、其時、當り米使來り互市を乞ふ、天下騷然爭ふて戰を議す、而して直弼獨り時勢の已むべからざるを知り、斷然互市を許す、終に櫻田の變あり、然れども後ち朝廷外交の禁を解き、我邦今日の文明を致すもの、直弼の明あらざるよりは、何を以て此に至るを得んや、直弼をして知るあらしめば、亦以て瞑すべきなり、直憲の封土を繼ぐや、時明治中興、會し廢藩置縣の令あり、邸を東京に移す、二十七年五月十八日、朝廷命あり此城を直憲に賜ふ、是れ彦根城由來の概畧なり、

◎陸上運動部は對する所感

第五年級 大竹英之助
大橋愛造
早川清三

運動の必要なるは普く世人の口にする所として更に吾人の喋々を要せざる所なり、我校に於ても種々の運動機關ありて以て諸氏は勸誘しつゝあり、湖上白波を蹴て端艇を浮ぶるも壯なり、春風駘蕩の日運動

場裡に熱球を奔らすも亦快なり、擊劍もよし、機械体操もよかるべし、何れもみな体育衛生に適せざるはなきなり、余輩は今端艇及び擊劍の事は暫く論せず陸上運動(主として野球)を就き聊か所感を述べんとす。

抑も此野球は本校崇廣會に属するものなるは諸氏の熟知せらるゝ所なり而して其崇廣會に屢せる野球會が果して盛大なるや否やも亦諸氏のよく知らるゝ所ならん、四百餘名の青年に對して僅かに一千三百坪の運動場もとより廣しとするは足らず、然るに、雑草常に青々たるは何ぞや此一事を以て其陸上運動の如何は振はざるかを証するに足らん、放課後の運動場裡を見よ實に寥々寂然たる者に非らずや遇々バツトの音と共に東奔西馳するものもあるも其競技者たる常は數名に一定せるものの如し、然れば則ち此野球會は或一部の有志によりて維持せらるるものと云ふも敢て過言にあらざるべし、嗚呼實に崇廣會の遊戲として天下に紹介するに大に耻する所なしとせん

や。

我が熱情なる部長は夙に之を嘆き種々其獎勵法を考案しこれが勸誘を行ふと雖も未だ以て一も満足なる結果を得ざる也、時に或は日割を定めて以て之を促し一時は漸く隆盛の有様を見たりしも次第に衰微して遂に又顧みるものなきに至る、或は種々卑屈なる口實を設けて之を通れんとするものあるが如きは中堅國民たるべき我青年の無氣力を自証するものにして國家の爲め寒心に堪へざる所也。

斯の如き衰勢は吾輩不肖をも顧みず理事の職に當りこれが勸誘獎勵の不熱心なるは基をなすは言を俟たざる所にして余輩の深く諸氏に謝する所なり、然りと雖も常識ある會員諸氏にして苟くも本野球會の衰微せるを見れば何ぞ奮然立てこれが挽回をはからざる野球會の發揚は實に崇廣會の名譽にして崇廣會の名譽は我校の名譽也否實に諸氏の名譽なり。

健全なる精神は健康なる身体に宿るとはこれ古人の格言に非ずや、假令千人に秀で万人に優るの才智あ

りと雖も面色常に蒼然として骨肉瘠せ精神衰へ遂には病床に呻吟するに當りて其才智果して何の用がある咬臍之を悔るも及ばざらん、体育の養ふべきは將に其發育の最も盛なる我中學時代にあり、嗚呼國家を愛するの士よ、身を愛するの士よ、諸氏が日々書を繙く餘暇空しく教室に逡巡する勿れ、時來らば書を抛ちて直ちに運動場裡に出で或は鉄棒に下り、或は木馬を飛び、或は走り或は跳ね健全なる身体と共に堅忍不拔の精神を養成せんとを務められよ、然る時は彼の部長の常に諭示するさゝ「落書は次第に消ゆべし、机の破損も亦少なるべし」。

今や第十五學年も將に逝かんとす、崇廣會役員改選と共に余輩の陸上運動部理事を辭するの日近きにあり、余輩は諸氏がよく誘掖して生等が過去の任を全からしめたるを謝すると共に將來運動場裡に寸草なからん事を望むもの也。

終に臨み余輩は更に一、二の意見を建白して會員諸氏の同情を得んとす。

一、選手選定法、熟々過去の歴史を考ふるに野球選手手中は運動にのみ偏するの弊風あるものの如し、之れをして單に余輩の杞憂に止まらしめば幸甚といへども今之をして實ならしめんか野球選手は一種の技藝家となり彼の俳優輕業師の類と撰ふ所なきにいたらん、斯の如くなる時は選手は技藝家として却而會員に擯斥せられ終は野球衰亡の一因ともならん、此の恐るべき源因を未發に防ぐは正に現時にあり、故に我等が望む所のものは假令技術に於て一、二の欠点あるも寧ろ學術、品行共に中等以上に位して苟も野球に志あるものを舉げて選手となし日々の練習怠るなく真正の選手を組成せば其名譽は益々高く其隆盛亦期して俟つべき也、余輩今迄誤て選手となり其選手たるものゝ体面を汚したる事亦尠ならずたゞ其已往を顧み慚愧に堪へず乃ち所感を述べて以て諸氏の參考に供するのみ、諸氏幸之を諒せられよ。

二、獎勵法、野球獎勵法に就きては是迄種々考案を

回らすといへども一として良果を收むるに至らざりし事前述の如し、則ち最後の良法として賞牌授與法なるべし、然りと雖も其授與法を濫にせば賞牌の賞牌たる眞價を失ふの恐あるを以て其數を十個或は十五個等に節約し賞牌をして非常に貴重なる價値を有せしめ、之れを得んと欲するものは四月以降數多く競技をなし又技術もよく發達せしもの即ち一ヶ年中に於て良成績を占むるものにあらざればたゞ一時の勝敗に於ては何如に拔群の功あるも決して得べからざるものとし名譽なる式場は於て之れを授與する事とせば恐らくは獎勵の一端ともならんか。

あ、滋賀の健兒よく立て鉄腕を振り四百の勇士に秀で燦爛たる賞牌を得んと欲するの氣力果してあるや否や。

三、會員の心得、是迄選手を依頼するに種々口實を設けて之れを通れんせしもの少なからず、余輩心中竊に之を解する能はざりき、聊も選手たるものは四百の學生中老練なる者を選抜せるものなれば甚だ名譽

あるもの也、然るに之れを避けんとするは未だ選手の何者たる所以を知らざるものとせざるべからず、今余輩の陳述する所勵行さるゝを得ば選手の名譽益々大とならん、嗚呼會員諸氏舉て選手たらん事を務められよ、

吾人の望む所たゞ是のみ。

◎友人は寄宿舎に入るを勧むる書

第四年級 山本小五郎

寸簡を裁して某君足下に呈す、僕一日郊外に出で菁花の爛漫として甚だ愛すべきを觀る、試と一枝を折りて家に歸り之れを見れば、風韻の賞すべき無く、野に觀る所に若かざるを覺ゆき、其故何ぞや、蓋し數枝集合せざるを以て也、因て思ふ、人團結すれば能く偉業を奏し、分るれば則業成り難き亦此れと同理なることを、夫れ人團結すれば則ち密なり、分る時は交り疎なり、近き者は交り密にして、遠き者は交り疎なり、故に交を密にし志を同くして以て吾校の美名を舉んと欲すれば、寢食を俱にし學窓を

同くするに如くはなし、而してこれを爲すに法あり、即ち入舎して俱に語り俱に笑ひ、學を同くし遊を同くし、共に俱に道を修め學を習ふ亦樂しからずや、僕初めて此地に學び初めて舎に入るや、舍生或は規約を破り、逸遊を好みて勤勉をせざる者あり、慷慨の士有りと雖も之を如何ともする能はざりき、今や舍則大に改まり、學規肅然として道行はれ、德養はる、號聲響かば忽ち集り、食時到れば直ちに食す、又前日の比にあらざるなり、而して一舉一動苟もせず、長は幼を愛し、幼は長を敬し、舍中親睦兄弟の如し、蕭秋の候、草木枯死し、蟲聲唧々、或は細雨霏々、簷溜滴々として三更に腸を斷たしむ、然れども舍中は和氣藹然秋日猶ほ春日の如し、天明かなる日同人を伴ひ、短艇を湖上へ浮べて輪贏を波間に争ひ、或は數十の健兒を誘ひて野球を郊野に闘はすも、亦以て快を取るに足れり、一呼せば忽ち數十人の同志を得、團隊を組織して山河を跋涉し、苦樂を共にして協同生活を營むは、豈樂しからずや、君何ぞ入

合せざるや、舎は是れ校風を揚ぐる礎なり、故に舎振はされば校衰ふ、舎中に道行はるれば校即ち盛なり、校盛なるは即ち余輩の最も慶とする所なり、舎には固より規則ありて、初めて入るものは少しく身の不自由を感ずると雖も、理を知るものは之れを行ふこと甚だ易し、而して習慣終に天性を成し、將來事に當りて不屈の心志を養ふに足る、君何ぞ入舎せざるや、學校に在りて寄宿舎に入るを欲せざるものは、決して學生の本分にあらざるなり、君幸に吾が意を諒せよ、

◎偶感漫錄

第四年級 藤田 義亮

曠世の大業を成さむと欲せば曠世の大英斷を要す、而して常に進取の氣象を養成し、萬難不屈の意志を保持せざる可からず、吾人の世に處するも亦然り、決斷心と奮發心とは實に吾人の進歩を助け、又百折不撓の精神は實に吾人が希望を成就せしむる基となるものなり、因循姑息細事に齷齪たる者、豈大業を成就するを得むや、余輩亦氣慨なく、抱負なく、實

に進取の氣に乏しきもの、誠に夜半風靜に殘燈明滅のとき、千古不磨の偉業を建てし吾人が祖先を懷ひ威風堂々四隣を轟かせし古英雄を追想する毎に、轉た慚死の感無くんばある可からず噫。

學生と品位

學校は學藝を修むるを以て主とすべきにあらず、品性を陶冶するを以て目的となすその學藝の如きは、僅に之が隨伴に過ぎざるなり、品性高潔ならずして百藝を習得するも何の効かあらん、故に學生は品性を高尚にするを第一とす、即ち内は道德を養ひ、外は謙讓を宗として、以て國家の基礎とならざる可らず、「スマイルス」曰はずや品性は産業なり、品行は所有物中最も高貴なるものなり、品行は衆人の厚遇を求め、衆人の尊敬を致す所の抵當なりと、吾人學生たるもの、此に於てか大に反省せずんばある可からず、かの浮華輕薄の惡風に侵染し、着實の心なく、敢て品位を省みざる學生は、縱令一朝僥倖にして學位を得、或は官位を得るも、私行を恣にし國家ある

事を忘れ、既に人に尊敬せらるゝ地位を有しながら、遂に社會より擯斥せらるゝに至る、嗚呼吾人學生たるもの、猛省せざる可けむや。

學生と一致心

一本の喬木、大風を抗する能はず、千株の森林、風に折れたる例を聞かざるさう、團結すれば根源愈々固く、孤立すれば根源益々薄弱なるは論を俟たざる事なりとす、而して一致協力の必要なるは、吾人學生の間に於て甚だ切なるものなり、一事を起し一件を治せんと欲す、一致心の必要を見る、而して一致の裏面は即ち制裁を意味す、吾人が昔日武士道の盛なるを見、羨慕して止まざるものは、即ち彼等の間に於て制裁の強固なる所以を尙ふにあり、彼等の中若し卑劣の行あるとせんか、彼等は決して郷黨の中に齒するを許さざりしなり、實に制裁は至大の勢力を有す、直言極諫以て卑屈心を正し、尙以て及ばざる輩に向ては鐵拳を喰はして、以て後を懲すその舉動、稍粗暴に近きも吾人はこの間に於て滴るが如き

赤心、溢るゝが如き友情の迷るを見るなり、今日破廉耻の徒、放歌空論を事とし、恬として耻ぢざるは一は制裁力の乏しきが故なりと信ず、苟も一國の正氣、一郷の美風を發揮せむと欲する者は、須らく強固なる團結と、嚴重なる制裁力を修養し、以てそれが發達を圖らざる可からず。

所謂和氣霽然

吾人が望む所の團結と制裁は、即ち品性を高め、學德を養ふの謂ひにして、かの弱者を苦め、長者を輕視する非禮沒德の團結の如きは決して望まざる所なり、即ち強固なる一致を養ふを以て第一とす、即ち學生は各々自然を守りて敢て人を恨みず、人の進歩を忌みずして己の實力の不足を省み、互に協力相助けなば、朋友の交情實に一髮の空隙なく、學德の進歩する事、必然なりとす、かの學友互に相反目し、師弟相敵視して、遂に校中の泰平を見る能はざるものは、即ち朋友の道を忘れ、師弟の分を辨へざるが故なり、縱令師は師たらざるも、弟は弟たるべきの

心を以てせば、遂に和氣洋洋たる真情を見るを得可く、こゝよ於てか學校の弊風を矯め、各自の名譽を博するに至る可し。

◎偶感小言

第三年級 小倉 雅吉

今年葉月のはじめ、友人數名を誘ひて、國祖伊勢大神宮へ詣で、かたはら、名所舊跡を探りけり。かへさには、阿漕の驛よこやまり、かの阿漕塚を觀ぬ。徳川幕府のころなりしとか、この國に、阿漕平治といふ至孝の武士ありけるが、或る時父病にふしけるが、さまゝゝゝ力をつくし、かど、快からず。あるくすしの云ひけるには、當時領主の、殺生禁斷とせる某池に名魚あり、そを漁獲して食はせなば愈ゆべしといへり。此事を聞きし平治は悦ぶ事たゞならず、如何にもして之を獲んとおもひ、窃ゝ小船に乗りて、網うち下せしに、思ひきや、寶劔の網にかゝらんとは。こは如何にと、いふかしみつゝ平治は頭に被りし管の小笠も打ちわすれて、家まかへりぬ。

此の池の番人、平河原治郎藏といふもの、この笠を

拾ひて、領主へ訴へんとせり。是によりて平治は、殺生禁斷の池に網を下せし咎めにあはんとす。あはれ世になれなる孝子も、捕手の繩目にかゝらむこと、眼前に迫れり。折しも彼の治郎藏は、もど阿漕が部下なりしことを思ひいで、昔をしのびかね、笠に記せる平治の二字は、己が姓と名との、かしらなる文字を、しるしなりと届け出で、平治が罪は代らんとせり、云々。此の談話は妄誕不稽の談ながら、道しるべをやとひて、到り觀るに、ひろき野邊の森中に、石碑の立てるのみ。碑の面には、芭蕉翁が

月の夜の何をあ古木に鳴千鳥

の句を彫りつけたり、碑陰には

此地大樂山上官寺舊跡也

硯面東都雪中菴完來所

文化十三年建之

嗚呼、今や我國は、明らけく治まる御世に、あらたまりて、事物工藝など大に進みしに、かへりて、徳義のとみに衰へて、忠孝作善の人物多からず。

余、つらゝおもふに、縱令、此事妄譚にもせよ、平治の行爲は、もとより、父を思ふの一念にいで、治郎藏は、友誼に篤きを、明にせり。さればわれ等青年たるもの、自ら奮ひて道德を修め、所謂古の武士道德を興し、世にかゝる美談を、のこさんとを、務めざるべからず。

◎發火演習の記

(雜語部理事)

秋容決適、氣清き十月十三日、我校は例に依りて發火演習を高宮近傍に舉行す、此日宿雨新に霽れ、天空清澄、微風徐ろに面を撲つ、午前第七時、正服正帽に身を固めたる健兒三百有餘名は、早や運動場を集まれり、廳がて劉亮と朝風に和して響く一聲の集合喇叭に玉木池田兩教官指揮の下に、諸先生も引率されて、歩武肅々、校門を出で、道を東南にどりて進行すれば、天朗らかにして氣亦爽快。

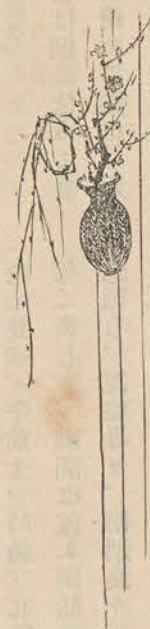
第八時、大堀村に於て約廿分間の休憩をなし、再び發す、高宮村某寺に着し、此處にて演習に關する想定及訓示等あり、演習部隊三四五年級を二個中隊に編

成し、兩教官號令の下に南進す、非演習隊第一二年級は、青木先生之を統率して次す、演習地は犬上川兩岸附近のもの、如し。

壹貳年級は、川原の中央に横隊を布きて見學し、今や戦ひ始むらん、今や撃ち始むらんと、片睡を吞んで待つこと少時、時しも東方に於て白軍の斥候二三はの見ゆ、午前十一時過、北軍より打出す一發の銃聲と齊しく、戦鬪は遂に開始されぬ、同時に南軍も應戦し、銃聲轟々、硝烟漠々、近林爲めに震ひ、犬上川爲めに時ならぬ脩羅場と化し、兩軍必死となりて對戦す、折しも南軍は其右翼を増加し、其展開面を大にし、白帽幾十、力を協せて一齋に撃出せば、事の意外に北軍は、少しく躊躇の色見えしも、彼は防禦、我は攻撃、何條追崩さずして可ならんやと、戦鬪線を東方に延して、白烟切りに酣なり、やがて、北軍は時分ぞよしと思ひけむ、突貫の一令と諸共に、一時に長堤を躍り越え、漲る硝烟を潜りつゝ銃口揃へて呐喊すれば、南軍もさるもの、直ち堤上

に伏して瞰撃烈しく、今や兩軍の劍戟將に相接せん
とするの一刹那、忽ち響く休戦喇叭に、敵も味方も
こゝに全く演習を終了しぬ、晝飯を喫す、時已に二
時、秋陽輝々として健兒汗に浸されぬ、休息暫時、
歸路に就き、軍歌の聲と共に校門を入りしは午後四

時、夕暉漸く西山に傾きし頃なりき。
一年の好期は秋天なり、体氣の爽然たるは秋風なり、
此機に當りてこの舉ある實に宜なり、吾人は今後屢
々此快事に遭はんことを切望するものなり。



本校日誌摘要 (自明治三十三年六月二十二日)
至同 年十二月三十一日)

六月二十三日 新潟縣高等女學校長柏原一德氏來校、彦根高等女學
校長山下新力氏來校
二十五日 山口縣岩國中學校長橋本捨次郎氏來校
二十八日 川口教諭心得第三年級乙組級監督を命ぜらる、
七月一日 愛知郡視學松原廣吉氏來校
六日 午前八時より市尾喜一郎先生の新任對面式を舉行す
、式後校長の訓示あり、
十二日 午前八時生徒一同を講堂に集合校長より訓示あり
十三日 學期試験前の体重を測定す、本校卒業生高橋行次氏
來校授業參觀
十六日 本日より七日間第一學期試験執行
二十日 若山犬上郡視學來校
二十三日 試験終了後校長より訓示あり、試験後の体重測定を
なす
二十一日 岐阜縣師範學校教諭津川竹治郎氏來校、
二十七日 愛知縣第三中學校長今井貫一氏來校
九月十一日 校長より學生心得に付訓示あり

十三日 第一年級々長任命式舉行、
十九日 法學博士増島六一郎氏來校
廿三日 彦根招魂社參拜
廿九日 學校醫より傳染病豫防上の件々に付訓示あり、
演說討論會開會、
十月四日 体格検査執行
五日 同
九日 岐阜縣中學校職員七名及生徒百三十三名來校
十日 岐阜縣中學校教諭心得高橋敏太郎氏來校、
十月十二日 岐阜縣東濃中學校職員生徒三十二名來校、佛教中學
安井承信氏來校
十五日 市尾青木兩教諭本校を代表して 皇太子殿下當驛御
通過を奉送迎す
十七日 陸上運動部野球大會舉行
廿三日 高嶋郡安曇小學校職員生徒三十三名來校
廿六日 奈良縣郡山中學校教諭石橋重吉氏來校
三十日 甲賀郡土山尋常高等小學校職員生徒八十四名來校
教育勅語下賜十周年相當に付勅語奉讀式舉行
十一月三日 天皇節賀式舉行及陸上運動舉行
十七日 阪田教諭新任對面式舉行
二十日 校長より武學生獎勵の爲井伊家學費補助の件に付訓
示あり
廿七日 皇太子殿下當驛御通過に付校長及青木教諭奉送迎す
元本校々長今井恒郎氏來校
十一月一日 佐伯教諭福岡縣へ出向、級監督任命及び、雜誌、演

五 日 說部長任命あり
八 日 佐伯教諭を當驛に見送る
十一 日 皇太子殿下御結婚記念樹を植付く
十三 日 杉浦教諭新任對面式舉行
廿 日 第二學期試驗本日より執行
廿 日 廣田直三郎氏來校
廿 日 第二學期試驗終了
廿五日 廣田直三郎氏本校講師に任命あり

◎本校職員辭令

明治三十三年

七月三日 任滋賀縣第一中學校教諭(奏任待遇)
市尾喜一郎
同 三級上俸下賜
同 滋賀縣第一中學校教諭心得を免す
同 加部 嚴夫
同 滋賀縣第一中學校講師を囑托す
同 上
同 月俸金四拾圓支給
同 上
八月廿九日 依願教諭心得を免す 越山平三郎
九月廿一日 依願教諭心得を免す 松井 久吉
十月卅一日 滋賀縣第一中學校教諭心得を命す
月俸金四拾圓給與 森 脇萬

十月九日 任滋賀縣第一中學校教諭 坂田 文次
同 給五級上俸 同 上
十月廿九日 依願本職を免す(奏任待遇) 市尾喜一郎
十月廿九日 依願本職を免す(奏任待遇) 林 久太郎
十月三十日 福岡縣へ出向を命す 佐伯 俊二
十一月四日 任滋賀縣第一中學校教諭 杉浦 孝本
同 給六級下俸 同 上
十二月八日 任福岡縣中學傳習館教諭 佐伯 俊二
十二月十五日 月俸金五拾圓給與 同 上
同 四級上俸下賜(奏任待遇)
同 給六級上俸
同 月俸四拾五圓支給 青木 義教
同 月俸金六拾五圓給與 服部 章
同 月俸金四拾貳圓給與 加部 嚴夫
同 月俸金四拾貳圓給與 曾田 忠太
同 月俸金四拾貳圓給與 佐藤鐘太郎
同 月俸金四拾圓給與 今永 英足
同 月俸金參拾五圓給與 玉本 敏彦
同 月俸金貳拾圓給與 池田 衛
十二月十六日 滋賀縣第一中學校講師を囑托す
十二月二十日 同月俸金七拾五圓支給 廣田直三郎
滋賀縣第一中學校教諭心得を命す

月俸金四拾圓給與

岡田杏次郎

明治三十四年

一月十八日 免兼舍監(奏任待遇) 青木 義教
一月十八日 兼任滋賀縣第一中學校舍監 坂田 文次
同 滋賀縣第一中學校舍監心得兼務を命す 川口 五郎

二月十六日 滋賀縣第一中學校教諭に任す(奏任待遇)

同 三級上俸下賜 廣田直三郎

二月十六日 滋賀縣第一中學校講師を囑托す 同 上

同 月俸金六拾圓支給 小出廣太郎

◎級監督の任命 齋に第三級乙組監督野澤先生、
辭職せられしを以て、昨年六月二十八日其後補とし
て川口先生に任命せられたり。

◎市尾先生 吾人は前々教頭今井先生を失ひ
て愁眉久しく解けず、空しく數ヶ月を経過せしに、
幸々多識なる市尾先生を其後任に得、昨年七月六日
を以て、雨天鉢操場に於て其新任初對面式を舉行せ
られたり、吾人は當時此良先生を得て大に意を強う

せしに、圖らざりき、喜悅せし間も無く、赴任後數
月にして事を以て職を辭し去られんとは、吾人は昨
先生を迎へて今や早くも送別のことに至りたるを思
ひ、深く遺憾とする所なり。

十二月三日、雨天鉢操場に於て、先生の送別式
を舉げられたり。

◎第四回体重測定 第十五學年第一學期試験
前後に於て生徒体重測定を執行せり。

◎第十五學年第一學期試験 昨年七月十六
日より同二十三日迄、一週間執行せられたり。

◎夏期休業 昨年七月二十三日第一學期試験結
了するや、生徒一般を運動場に集合し、校長より左の
意味にて休暇中に關し心得べき要件を訓示せらる、
休暇を與ふるの目的は、學術を究むるよりも寧ろ
學期間の苦學に堪ふべき強壯なる体格を作るにあ
る事、故々勉めて山野の跋涉、遠足等凡て精力養
成に資する運動をなすべき事、
禁烟令を違犯せざる様、心得べき事、

◎越山先生 先生一昨年六月、我校に赴任せら

れて英語科を擔當せらるゝと、茲に一年有餘、我校
嚮に敎官更迭甚だ頻、殊に英語科の如きは著しく遲
滯の境に沈めり、然るに先生一たび我校に敎鞭を執
らるゝに及び、懇々として倦まず、孜々として怠ら
ず、是に於てか漸く改進の緒を開き、今に及んで幸
に稍其舊觀を脱し、將に成績の見るべきものあらん
とす、偶々先生の職を辞せらるゝに會す、吾人何ぞ
豫め今日有るを想はんや、吾人は今や涙を揮て其行
を送るの已むを得ざるに至れり、顧みて先生が我校
に献貢せられし所多大なるを思ひ、其鴻恩を謝して
止まざるなり。

◎第二學期開校式 昨年九月十一日第二期開

校式舉行せらるゝ、式に列するもの三百有余、席定ま
るに及び校長左の件々に就き懇ろに訓示せらるゝ。

一、學科の選擇を避くる事

一、試験前過度の勉強をなさざる事

一、体格養成の事

◎第一年級々長任命式 嚮に本學年始、例

によりて級長選舉の事あり、當時第一年に限り都合
によりて之を行はざりしが、第二學期始に於て夫々
選舉を行ひ、其結果は從ひ、九月十三日午前第八時、
第一年級生徒一同を講堂に集め、市尾敎諭校長代理
として級長任命式を舉行せり、青木、今永、兩級監
督、池田生徒監等臨場、當日任命の級長如左

同	第一年級甲組級長	外村孝造
同	副級長	島田佐武朗
同	乙組級長	高木喜一郎
同	副級長	山上晴顯
同	丙組級長	中澤治三郎
同	副級長	德永乾堂

◎招魂社參拜 昨年九月二十三日招魂社秋季

祭典舉行せらるゝに當り、例により同日午前十時職
員生徒一同、同社に參拜せり

◎第十三回演說討論會附校醫の衛生上の注意

昨年九月廿九日午後第一時、大日方學校醫より生徒

一般に向て、衛生上に就き説示せられたり、乞ふ左
に其の一斑を記さん、

衛生注意に關する諸般の事項は諸子既に已に之を知
れり、然れども昨今各地に赤痢病の蔓延する徴候あ
り、乃ち其豫防上に就き茲に一言を贅せんとす、請
ふ静默の數刻を與へよ、

抑も衛生に二あり、曰く自己の衛生、曰く公衆の衛
生是なり、自己の衛生とは躬ら己が身体を攝養する
こと、公衆の衛生とは公衆に對して衛生を守ること
なり、前者は各自之を守る可なり、今茲に言はんと
する所のものは寧ろ後者にありて、公衆衛生の社會
に及ぼす影響甚だ大なり、例へば諸子の中一人にて
も赤痢患者を發せんか、勢、衆を隔離せざるべから
ず、其災は個人に限らず、社會全體に關係す、故に
自己の不注意如何は害を他に及ぼす原動力となるな
り、然れば則ち先づ自己の身軀を攝養し、以て病毒
に感染せざらんを要す、乃ちこの豫防策を講ずるに
當り、若し人跡にして無病健全ならんか、如何なる

病毒も之を侵し得べからざるなり、されど之に反し
て身軀に不攝生を極めんか、即ち病毒の襲ふ所とな
るや明なり、而して疫病の據る處は胃と腸とに在り、
今主として胃と腸とを傷ふは感冒なり、感冒は疫病
の攻め入る空隙なりといはれ、人或は一驚せん、感
冒はひとり咽喉のみ發するものにあらざる、胃腸に
も感冒あり、目下流行せるは大抵胃腸の感冒なり、
それ感冒は身軀の寒冷を感じて發する病なり、然れ
ば身軀を暖かにするは感冒を防ぐ唯一の策にして痢
病豫防法の一端なり、次に病毒の媒介となるは飲食
物にあり、彼の市中に鬻ぐ果物は概ね不熟にして、
而かも往々蟲類の寄生するあり、もし夫れ不熟の果
物を食はんか、胃腸を害ふや論を俟たず、其蟲類の
寄れる空隙には所謂病毒のひそめるなきを保せず、
殊に柿、棗の類に至りては、其甚だしきものとす、
諸子かゝるものを喰ひ病毒を導く勿れ、過日縣下某
校に發せし赤痢病は、或は當地より輸出したるやの
疑を抱ける者ある而已ならず、當地近傍には已に數

人の患者を出せり、されば當地は今や危険の地位にあり、乞ふ生水を飲む勿れ、又腸チブス病に、就きての注意もこれと大同小異にして、但々諸子一々に注意するの外なし、近村には數名の該患者あり、其村里を列擧すれば河瀬、高宮、日夏、西甲良なり、其地を旅行し又は其地に關係を有する人は注意せらるべし云々。

次で演説討論會あり、青木先生先づ壇に登つて曰く、「越山先生轉任せられて以來其後任者を得ず、茲に余部長代理として諸君の辯舌を聞かんとす、諸君之を諒せよと、既にして聲に迎へられて壇に登りしものは。」

○第一席 希望と實行 四年 岩田榮太郎

人にして功名榮達を望まざるものなく、名譽富貴を欲せざるものなし、されば希望は大ならざるべからず、項羽を見よ、白石を見よ、彼等は幼にして大なる希望を抱き、其目的を達せしにあらすや、現今青年輩を見れば、希望は則ち大なり、或は奈翁ならむと欲し、ビスマークたらんことを望む、然れども、これを實行するもの果して幾何ぞ、希望を實行するにはハンニバルの謂ゆる進むあるを知つて退くあるを知らざれ、若しそれ悉くその希望の如く

ならんには、人皆、英雄たらんのみ、然れどもこれ能はざるの事實なり、されば妄に分限不相應の大望を抱くも無益なりと、或はワシントン、或はフランクリンの小壯時代を引證し、論じ來り、論じ去りて要する所は希望を實行するにありと結ぶて演壇を下れり。

○第二席 僧日蓮とマルチンルーテル 佐藤先生

夫れ佛教の傳來は事々物々巨大なる影響を我が國に與へたり、而してその起りし地は印度にして、其印度は南北に二分せられ、東進し、支那を経、欽明帝の頃百濟によりて輸入せられしなり、爾來時移り星變り、我が國にて隆盛を極めしは奈良朝の時代にして、就中、聖武、孝謙、二帝の御代なりとす、夫の國税の半を之に費したるも此時にあり、然れども一頓挫を來たせしは平安朝の中世彼の空海の出でし後にして、再興を見しは鎌倉時代なり、此時に當り源空は淨土、親鸞は平民的宗教即ち眞宗を開き、日蓮は日蓮宗を開けり、抑々日蓮は安房に生れ、其貧賤の家の一小僧に過ぎざりき、然れども梅檀は二葉より香ばしかりけり、彼は成長するに從ひ、志愈々遠大となり、剛勇の氣象は益々剛勇となれり、而して其の行やソブライ

ムなり、其言語に顯はす所、他僧と異なる所多く、最も豪膽なりき、

當時西洋にてマルチンルーテル生れたり、彼れは近世紀の始を以て生れ、其家は日蓮と同じく貧賤にて、キツテンベルグの大學に法學の教授たり、更に神學を授けたりと雖、他教師と常々軋轢を醸せり、是に於てか、新宗教を開かんと決心し、論議の巷に身を投じて、西奔東走、時に或は會議所の前に路傍演説をなし、遂に破門に處せらるゝも意とせず、誠意誠心益々勵み、聖書を翻譯し、終に一派を開けり、かの三十年戦争の如きも此の新教に原因せり、然り而して日蓮とルーテルと其事業に於ては大同小異なれども、前者の後者よりすぐれたるや、其サブライムにありと、

○第三席 蓄積力の養成 二年 清水省三

夫の木を見よ夫の流車を見よ、皆是れ内部に含める見ざる力あるに由るにあらずや、豊太閣が草履取りたりしに他日天下を掌握せむとする基あり、孔子が苦辛を耐へしは後世聖人と呼ばるゝ礎なり、此礎、此礎は即ち蓄積なり、滔々天下の學生を通覽するに、其の外部のみ修飾し其内部は空虚にして一の實力あるなし、乞ふ外観より内部の實力を養成せよと。

○第四席 我謾力 青木先生

我謾力の必要を説き、我謾力なくして破天動地の事業を成就するを得ずと縷々陳せらるゝ所ありき

○第五席 何ぞ富豪家の無氣力なる 三年 辻 一 三

現今は大事業を企つべき時にして、南清の如き、北米の如き、其經濟的領土を擴張するの地は枚舉に遑あらず、然るに世の富豪家は榮華奢侈に流れて一生を徒費するもの多し、嘆すべき哉、それ世の富豪家と目せらるゝ者彼の我國労働者が西比利亞に、北米に孜々勞するを見て意とせざるや、かの醜業婦が移住するを聞くも耻とせざるや、内地にて其事業を擴張する能はざるは何ぞ外國に渡りて大事業を起さるゝと説き、遂に二十世紀の相續する諸君は徒に内地に關礙たらんより、世界的活眼を開きて、この大舞臺に雄飛を試みられん事をと結ぶ、

○第六席 作文に就ての所感 加部先生

作文に關しては已に既に世に定論あり、又何をか贅せん、作文として文題を得、之を作らんには他の課業より甚だ困難なる事業なり、然りと雖、練習を積めば何ぞ難からん、例へば遠きに到らんとするに草鞋輕裝、以て行かば容易なるべし、是に反して甲冑に身を固め、上下を附けて行かば或は其重量に堪へず、或は世の笑ふ所となる、作文に於ても亦一の異なる所なし、世の文を作らんとす

るもの、往々分限不相應の難文字を羅列し修飾せんとするを以て所謂變流の文を得るなり、豈に彼の重量に堪へざると異らんや、抑々人、談話をなすは其思想を述ぶるものにして文章も亦之と同じく、極めて平易に其思想を書き顯はすに足る、故に作文の要は、徒に、難文字を羅列するにあらずこの心を以て文を作らば、易々其上達を見るべしと、

○第七席 社會の大勢及び歴史上顯はれたる英雄に就て 市尾 先生

総て世は戦争、平和の二時代に分割せらる、前者は軍人、後者は商人の權利を恣にする時なり、平和の時代は常に戦争時代に壓倒さるゝなり、上古を見れば皆戦争時代、即ち武人跋扈時代多數を占め、世を風靡するは主として此の手段をとり、夫の露帝彼得一世が世界統一策は是れが稍々趣を異なせるものとして、而も能はずして止みぬ、嗚呼世界を一統し、喜馬拉山も大西洋も皆日章旗を翻々たらしむるの如何に壯快なるかを思へ、然り而して古代は於て列國この舉を企てたるもの多しと雖、能く一統せるものなく、遂に世界一統策は

不能の二字を以て没せらるゝに至れり、これ其良策を得ざればなり、然るに近世に至り、始めて武力を以てせずして商力を以てするの優れるを腦裡に浮べたり、商力を以て他國を攻めんとするは現今の形勢にして、徳川氏の如きは財政を以て諸侯を壓せるにあらずや、かの所謂、鉄砲丸より珠呂盤玉にありてふ方略を用ゐるに如かざるなり、英の如きは、商權を擴張せんとして先づ殖民地を起し、或は鐵道布設權を他國に求めつゝあるにあらずや、我が國に於て、軍事は北清事件に見るべきものあり、而して次に要するは商權擴張にあり、然るに我が富豪家の多くは、徒に金銀を蓄積し、敢て活動せざるを以て商業微々として振はず、經濟界の不振を訴ふるに至れり、吾人は正に奮つて日本の商權を擴張し、列國に劣らざらんを務めざるべからず、彼の彼得大帝の如き自ら職工となり、他國に流浪し、よく今日の露を致したるにあらずや、然り而して商權擴張の大任を全ふするは即ち諸君にあらずして何人ぞ。

○第八席 現今道德の頹敗を慨す 二年 廣瀬 淵龍

聖言を前陳して且つ曰く、禮正しければ身自ら正しと、我が國は古來君子國として他邦人の尊崇せらる、然るに我が國現今の道德頹敗は實に驚ろくに堪へたり、試に學生を見よ、輕々薄々一つの取るべきなし、嗚呼斯の如くして我が國今後道德の成行果して如何に慨して墮を下る。

○第九席 演題未定 五年 湯本 信雄

優勝劣敗は世の常なり、今や中學生は日に増加し、其大學校に入らんとするものは多數の人と競争せざるべからず、故に勉勵と忍耐とは必要なり、而して忍耐力を養ふには體育の必要あり、然るに我々機關の整はざる一として満足する能はず、實に慨歎至極なりと。

○第十席 奮へ諸君 三年 廣崎 浩一

我が國現今の形勢は迫りて滔々底止するなし、此を救ふは青年諸君にあり、青年たるもの豈に奮はざるべけんや、然るに現今青年の狀態を顧れば到底覺束なし、それ反省一番せよと警醒す。

○第十一席 水泳に就て 今永 先生

余一昨年來水上部長として生徒諸子をして游泳術を練習せしむべき任に當れり、然れども、病氣の故を以て能はざりき諸子これに諒とせよ、余は此に游泳に就ての二三の心得を陳し以て本日之責を免れんとす、抑、身體の元來浮び得るは生理學者の證明する所にして、其能はざる所以は狼狽若しくは恐懼の故を以てなり、然るを其狼狽、

若しくは恐懼を感ぜざらしむるは即ち游泳術にあり、その游泳術には蹈海術、貫海術等の種類あり、余は唯々游泳術の講義より寧ろ其緩急の場合に於ける二三の注意を述べんと欲するものなり、もしそれ水中に溺没せんとするものありて、それを救はむと欲せば、先づ救ふべき人の前方より其旨を示し、然る後背後は迂廻して以て拉ふべし、或は洪水汎濫の時に際し、河水を横斷せんと欲せば對岸の數町下流を臨みて泳ぐべし、又渦水に入り身體の自由を失ふ時は直立水底に沈み、然る後水底を逃れざるべしと懇切、而も實行上最も必要なる点を挙げ、且つ水泳の起原を論證し、總て水棲動物の行動を見て發達せしものならんかと結ぶる、

○第十二席 愛憎論 三年 木村 一郎

愛憎には公私の別あり、廣く愛すべきを愛し、憎むべきを憎むは是れ天性道德上の觀念にして、私愛私憎はこれ道德に違悖するの行動なり、夫の清藤呂が道鏡を憎めるは公、明智光秀が織田公を憎めるは是れ私也、人に自愛の心あり、公愛は是れ自愛の至情なり、而して小人の常に事を誤るは私愛私憎を基に行動するにあり、世人須く公平に愛憎するの念なからず、宜なる哉、汝に出で、汝に反るの金言や。

次で討論會あり(時に午後四時三十分)、論題「獨習す

るは晝間と夜間と何れが可なるや」なり、青木先生登壇討論の意を述べらる、遇々座の一隅、聲あり、叫ぶらく、晝間を可とすと、既にして是が導火線となり、舌戦漸く酣にして、甲論じ、乙駁し、滔々底止する處なく、論議紛々、縷々として盡きざるものあり、晝間を可とするものは曰く、江畑君、曰く夏原君、曰く岩田君、曰く中川君(作平)夜間を可とするものは曰く堤君、曰く中村(進)君、曰く廣瀬(淵龍)君曰く柴田君、等の諸君にして快辨爽舌、言一言、滿場爲めに色動くを見る、而も夜間を可とするもの過半数を以て勝を制しぬ、遇々、席隅大聲叱呼するものあり、議長に向つて曰く、本題は討論題としての價值を失するの嫌ひなきにあらずや、乞ふ本題を撤回せよと、時に城山の晚鐘に驚く鳥聲は時を求めて啞々、暮色蒼然として湖上よりせまり、四顧模糊として眉目を辨せず、是に於てか、遂に局を結ばざるの止むを得ざるに至る、乃ち青木先生旨をつげ、「君が代」を三唱して散會す、時に午下六點

鐘。

◎第十五學年秋季躰格検査 第十五學年秋季躰格検査は、昨年十月三日より四日に亘り執行せられたり。

◎隣縣中學生の來校 時正に仲秋青年旅行の好季節なり、岐阜縣々立中學校生徒、修學旅行中、一日を隔て、本校に來れるもの二、前者を岐阜中學とし、後者を東濃中學とす。

◎勅語捧讀式 昨三十三年十月三十日は教育勅語下賜十週年相當に付、午前九時より職員生徒一同雨天體操場に集合、勅語捧讀式を舉行せり、一同入場、最敬禮を行ひ、次で『君が代』の三唱を終るや、校長進で開扉し奉り、勅語を捧讀せられ、閉扉の後校長は生徒に對し一場の訓示あり、次で再び『君が代』を三唱して、式を終り一同退場せり。

◎森脇先生 本校教諭心得松井久吉先生辭職せられ、其後任として昨三十三年十一月、森脇萬先生本校教諭心得を命せられ、英學教授の勞を執らる

ゝに至れり、吾人は先生を迎へて其薰陶を受くるに至りたるを喜び、我校の爲めに萬幅の心力を傾けて盡瘁せられん事を願ふ。

◎天長節拜賀式 昨年十一月三日は、我が御聖文武なる今上陛下の御寶算四十八の御佳辰に當るを以て、例により本校職員生徒一同は、嚴肅なる拜賀の式典を舉行せり。

因云 當日の式場は講堂工事中の故を以て、雨天躰操場を以て之れに充てたり、

◎秋季陸上運動會

崇廣陸上大運動會は先例を踏むて、天長節拜賀の式典終了の後、我が運動場に於て催されたり、此日や一天碧蒼拭へるが如く、微風又蕭爽として起る、會場の情況は畧々去歲に異なる無しと雖も、よく百事の周到、且整頓せるは蓋し近年に見ざる所なり、午前十時と云ふに運動開始の號砲は轟然耳朶を劈き煙火の雷霆は爆然中天に震ひぬ、之より一回二回と順を追ひ、序々從ふて施行せしもの、數積むて四十

有餘、中には小學校生徒の競技數回ありて、景氣一層を加へたり、左に當日名譽ある月桂冠を戴きし幸運子の人名を列舉す、

- 第一回 野球(八回)
- 第二回 二百ヤード競走
 - 第一着 廣瀬助一郎 第二着 勅使河原佐太郎
- 第三回 跛競走
 - 第一着 寺前伊藏 第二着 山本繁七
- 第四回 解題競走
 - 第一着 前川利七 第二着 横野寛 第三着 横山寅石
- 第五回 戴囊競走
 - 第一着 小嶋米吉 第二着 河原義一 第三着 大日方正隆
- 第六回 二百ヤード競走
 - 第一着 北村喜三郎 第二着 畑中義行
- 第七回 二人三脚競走
 - 第一着 三浦清一 久野寛 第二着 澤信二郎 關武雄
- 第八回 四百四十ヤード競走
 - 第一着 谷田秀吉 第二着 炊殿雄一郎 第三着 橋本久一
- 第九回 戴囊競走
 - 第一着 吉田三郎 第二着 東野修 第三着 川南定二
- 第十回 登校準備競走

第一着 北川九二郎 第二着 川村喜二郎

第十一回 二百ヤード競走

第一着 白井恒次郎 第二着 廣瀬惣

第十二回 和裝競走

第一着 吉田新七郎 第二着 今村義達 第三着 福井祐二郎

第十三回 二人三脚競走

第一着 北澤精一 岡野久二郎 第二着 河村喜一郎 小倉雅吉

第十四回 解題競走

第一着 清水省三 第二着 後藤基治 第三着 仁木二郎

第十五回 四百四十ヤード競走

第一着 白井恒二郎 第二着 牛渡日出太郎 第三着 勅使河原佐太郎

第十六回 一分間競走

第一着 大橋孝五郎 第二着 廣瀬淵龍 第三着 服部藤十郎

第十七回 二百ヤード競走

第一着 澤村專太郎 第二着 岩崎健三

第十八回 六百六十ヤード競走

第一着 勅使河原佐太郎 第二着 佐野善二郎 第三着 服部操

第十九回 一人一脚競走

第一着 北澤清一 第二着 藤林吾市

第二十回 戴冠競走

第一着 小林茂藏 第二着 藤田侯 第三着 湯本辰雄

第二十一回 八百八十ヤード競走

第一着 西澤俊一 第二着 橋本慎二 第三着 服部操

第二十二回 登校準備競走

第一着 吉田新七郎 第二着 橋村義淵 第三着 藤林信教

第二十三回 蹴競走

第一着 小西龜三 第二着 松井源四郎

第二十四回 擊劍三人拔

山本捨太郎 牛渡日出太郎

第二十五回 千鳥競走

赤組 早川清三 外十四名

第二十六回 野球投的(見合)

第二十七回 二百ヤード競走

第一着 島田善次 第二着 中川俊二

第二十八回 二人三脚(見合)

第二十九回 八百八十ヤード競走

第一着 中村進 第二着 小西龜三 第三着 中野爲三

第三十回 武裝競走(見合)

第三十一回 一分間競走

第一着 多胡庄次 第二着 岩崎健三 第三着 橋本慎二

第三十二回 和裝競走(見合)

第三十三回 一人一脚競走(見合)

第三十四回 四百四十ヤード競走(見合)

第三十五回 秀生競走

第一着 澤村專太郎 第二着 村上善正 第三着 中村進

第三十六回 六百六十ヤード競走

第一着 島田善次 第二着 多胡庄次 第三着 湯本信雄

第三十七回 障礙物競走(見合)

第三十八回 障礙物競走

第一着 古山治吾平 第二着 芥川龜太郎 第三着 北村健三

第三十九回 障礙物競走

第一着 島田善次 第二着 山本捨太郎 第三着 下村紫郎

第四十回 各級選手競走

雄風凜々たる各級二名の選手は、重大なる責任を負ふて雌雄を決せむとす、彼等の心事果して如何ぞや、俄然砲聲は轟きぬ、早くも彼等は砂煙を蹴つて馳せ出せり、今迄蕭然たりし會場は忽ち修羅の巷となり、應援の聲、號呼の響は、轟々として乾坤を撼したり、一周二周は既に此中に去れり、只餘す所は一周のみ、こゝぞ彼等が勝敗の決する所、勉め勵めの叫喊は、層に加はりぬ、忽ちにして一人の衆に拔んで決勝点に入るものあり是れぞ多年斯道の鬼神として知られたる四年級の選手、小島正之君其人なり、次いで入る二名の勇士は、

山本小五郎君(四年)、大橋愛造君(五年)、茲に於て金色燦然たる表勝旗は遂に四年級の有に歸し、本年の陸上大運動會も此花々しき競走を最後として、茲に全く結了を告げぬ、時に晚鐘殷々、喇叭一聲遠き傳ふ。

同日第四年級生徒が唱へし凱歌は左の如し、

花見し春の曙も。すいみし夏の夕ぐれも。早いつかも過ぎ行きて。秋も半ばになりぬれば。溪は紅葉のあやにしき。野は白菊の咲きみたれ。雲の行來も消え失せて。眺めまはゆき今日の空。みそち翔ける鶴さへも。治まる御世の長閑さを。千代萬代と歌ひつゝ。げは樂しき今日の空。皇統連綿比ひなき。清き御國のその末を。千代萬代に祝はんと。こゝは催す運動會。大旗小旗打なびき。歡呼の聲もいや高く。勇みに勇む男子らは。或は倒れ又は起き。互に雌雄を競はんと。奮ひ戦ふ其狀は。實にこそ國の固めなれ。げにこそ國の御楯なれ。

「さても重き」チャンピオン」今日の好日の晴の場に。互に勝を競はんこ。腕をさすりて意氣高し。忽ち轟く砲聲に。嵐は叫び草は伏し。山河もどよむ計りなり。あら勇ましの其状は。堅きを砕く彈丸か。暗を破れるいなづまか。群がる敵の其内を。勢ひ武く打ち進み。今ど手にとる表章旗。今ど手に入る表章旗。いざや歌へよ今日の勝。芹川波のうごく迄。いざや祝へよ勝いくさ。伊吹の峯のどよむ迄。

◎坂田先生

先生は山口縣の人、曩は陸軍士官學校教官、參謀本部に通譯官たりしが、昨年十一月十三日、越山先生の後任として本校に赴任せられ、英語科を教授せらる、吾人は今や此良先生を得て其久しく望みし英語の實力を養成するの機會を得、欣喜堪へず、奮勵以て吾人を教導せられん事を希望して止まざるなり。

◎校長の訓示

昨年十一月十七日生徒一同を雨天体操場に集合し校長より陸海軍志願者獎勵の爲

め、井伊家より學資補助の件につき訓示せられたり◎今井元本校々長の來校 曩に本校に校長たりし今井恒郎先生、昨年十一月廿七日來校せらる、先生其任を辭せられてより茲に四年、嘗て一日も先生の事を忘るゝの時なかりしに、今や其溫乎たる風采に接するに至りて、懷舊の情禁する能はず、而して昔日先生が悲境に際して遂にその職を辭せられし當時、先生が胸裡に鬱勃たりし心事の如何なりしかを追想して、轉た斷腸の感無き能はず、茲に吾人子弟は以來先生が健在なりしを祝し、計らずも此日一堂に會して再び昔日の溫顔を拜するに至りたるは欣喜堪へざるなり、當日校長の請により寄宿舎講堂にて一場の談話をせられたれば、其大畧を左にかゝぐ、

冒頭先づ我校とは先生が生涯の歴史中特筆大書すべきの關係あるをのべられ、更に道德上より剛毅の精神の必要なるを論じて、勇氣克己等の精神は皆是基づくものなりとし、翻て剛毅の道德に伴はざる時校に赴任せられ、在職茲に二年、昨年十二月福岡縣へ出向を命ぜられ、同縣中學傳習館(柳河)教諭に轉せらるゝに至れり、因て十二月四日雨天体操場に於て、先生の告別式を舉げ、翌五日當地出發、赴任せられしを以て、同日午前九時より一同停車場まで見送りたり、先生の我校に在るや、薰陶懇切にして周到なり、殊に先生が一昨三十二年五月、我雜誌部の部長に就かるゝや、時方々我部は萎靡不振の境にあり、先生發憤一番、一大刷新を圖り、爾來未だ二年ならず、發行の如きも其間僅かに三回に過ぎずと雖も、其改善進歩したるは何人も首肯する所として、如何に舊面目を一新したるかは識者を待つて後知らざる也、吾人は信ず、之れを我雜誌部の維新と稱する敢て溢美にあらざるべしと、本誌の今日あるもの、先生の盡瘁與つて力あるものなり、先生の功績此の如し、吾人は先生の辞任を惜むと共に、我雜誌部の爲めに貢獻多きを感謝し、尙は以後時に寄書を客されざらんとを熱望す。

に起るべき弊害に至り、遂に道德を以て訓練せられたる剛毅の精神は、人の世に處して最も必要なるものと論破し、次に周到の精神即ち緻密の意は、成功を期するに必要な所以を説き、如何に壯大なる抱負を有し、如何に大事業を企つるも、其思慮として緻密ならざれば、所謂餘裕を存する能はず、事物に觸れて躊躇狼狽するを免れざるを以て、遂には其意志を貫徹する能はずとし、終に社會的の德、即ち公德なるものを國民の有するに否とは、國家の存亡に關すとなし、忠孝の裡面には此社會的道德のなかるべからざるを説き、社會は個人の團體なれば其一分子たる個人は、此德を養ひ兩々相對して其安全を永久に傳へざるべからずと、

◎佐伯先生

先生は去三十二年十二月を以て我

◎級監督の更迭

二三職員の更迭ありし爲め、級監督の缺員を生じたるあり、よりて昨年十二月一日を以て左の如く更迭の任命ありたり。

第五年級	教諭	青木義教
第四年級甲組	同	坂田文次
第二年級甲組	教諭心得	森脇萬
第一年級甲組	同	玉木敏彦
同	丙組 助教諭心得	池田衛

◎演説討論會部長

本會演説討論部長たりし教諭心得越山平三郎先生、辭任せられて缺員なりしを、昨年十二月一日、教諭心得佐藤鐘太郎先生を以て同部長に任せられたり、同部は不幸にして屢々部長の更迭に遇ひ、本學年に於て既に三回、辭任の都度部長を缺く、是を以て同部理事諸君は、随時開會に關して斡旋する所ありしと雖、而かも意の如くならざりしものゝ如し、吾人は同部が新任部長の指揮を得て、着々盛運に赴かんとを祈る所なり。

◎坂田雜誌部長

佐伯部長の後を承けて昨年

十二月一日、坂田教諭新たに部長に就職せられたり、今や維新開運の地に在る雜誌部は、好後任者を得て更に改良を累ねられんとす、我が「崇廣」が愈々益々精彩を放ちて昨今世上に漫出簇生する、彼の流行的、形式的雜誌と遙かに其選を異にし、眞に我が校の文藝機關たる實効を收めんとす、蓋し日を卜して待つべし、吾人は由來微々たりし我雜誌部が、近時漸く好運に乘じ、着々完美の域に赴くを見て、心竊かに慶ぶものなり、諸君亦努めずして可ならんや。

◎林先生を送る

十二月七日、雨天牀操場に於て林先生告別式行はる、式に臨み先生吾人に告ぐるは謹勉以て業を習ふべきを以てし、且つ後日の大成を期すべきを以てせられたり、顧ふに、吾人は久しく先生の懇切なる教育を受け、前後四年間一日の如く、其鴻恩眞に海山も管ならず、然るに先生一旦病氣を以て本校を去らるゝに至る、生等豈に悲嘆に堪ふべけむや、然りと雖も生等何ぞ悲嘆よ了るべき、宜しく謹勉以て後日の大成を期し、以て鴻恩の万一

に報いんとを期すべきなり。

◎申すも畏れれど昨年 皇太子殿下

には御結婚あらせられたるにつき、吾人は其大禮紀念の爲に、紀念樹を植うる事となり居りしを、樹苗の無かりしより延引したりしが、十二月八日伊井家の諾を得て、外堀堤上は松杉苗約二百本を植ゑたり。

◎杉浦先生

十二月十一日を以て本校教諭として赴任せらる、先生は三河の人にて曩に東京に於て教鞭を取られしも、今や本校、漢文、作文科を教授せらるゝことゝなれり、先生が深遠なる學識に加ふるに、懇篤なる温情を以て吾人を導かれん事を希望して止まざるなり。

◎第十五學年二學期試験

昨年十二月十三日より執行し、同廿一日終了せり。

◎廣田先生

先生嘗て東京帝國大學に在りて専ら史學を修められ、業を卒へ出で前後、大阪、仙臺兩中學に奉職せられ、後、一年志願兵として兵役に服し、期満ちて今や我校に赴任して、歴史及び英語

科に教鞭を執らるゝに至れり、吾人嚮は市尾先生を送るの己むを得ざるに至りしを憾みしが、今、廣田先生を迎ふるの幸を得たり、吾人は大に之を喜ぶと共に、先生が今後我校の爲め大に盡瘁せられんとを希望するや切なり。

(雜報記事は明治三十三年十二月末日に締切)

本號は客年十一月月中は於て發行すべき豫定の處、部長辭職等の事情あり、爲めに發行の遅延せしは、謹て諸君に謝する所なり。

雜誌部理事



會 告

◎崇廣會役員姓名

會長	市瀬禎太郎
副會長	廣田直三郎
演說討論部	佐藤鍾太郎
部長	中村 進
理事	中津 治郎
同	辻 一三
同	坂田 文次
同	田川 七左衛門
同	田中 藤馬
同	伊藤 利三郎
同	廣瀬 勘次郎
同	廣瀬 助一郎
同	澤村 專太郎
同	青木 義教
部	水上運動部
部長	

副部長	今永英足
同	會田忠太
同	布部孝太郎
同	湯本信雄
同	小西龜三
同	下村紫郎
同	奧村房治郎
同	岡田彌橋
陸上運動部	平瀬作五郎
部長	玉木敏彦
副部長	池田 衛
同	早川 清三
同	大竹英之助
同	大橋 愛三
同	山本小五郎
同	白井恒次郎
同	田邊 隆吉
同	牧 秀賢
同	福嶋 郁三
同	岩崎 秀一
同	藤谷 三磨
同	岡野 千藏
會計	

◎新入特別會員姓名

彦根町字三筋町牧野十藏方
廣田直三郎
彦根町字沼波町 村岸方
阪田 文次
彦根町字本町鎗屋方
杉浦 孝本
彦根町字本町
森脇 萬
彦根町字上魚屋町
岡田 杏次郎

◎新入通常會員姓名

彦根町字芹橋七丁目
烟中 義雄
岐阜縣岐阜市米屋町
勅使河原 佐太郎

陸上運動會(明治三十三年十一月三日)寄贈

金壹圓 大東 義徽君
金貳圓 岡部 讓君
金壹圓 山本 正範君
金壹圓 小林 正策君
金壹圓 烟中 壯二君
金壹圓 近江商業銀行
金貳圓 廣野 織藏君
金貳圓 花柳 留次郎君
金貳圓 木英二郎君
金拾五圓 同町 根助 長
金貳圓 同町 會助 長
金貳圓 廣田 吉三郎君
金貳圓 廣田 七次郎君

金貳圓 森居 三二君
金壹圓 高木 一八君
金壹圓 眞塚 長平君
金五十錢 南澤 長次郎君
金五十錢 小倉 喜三郎君
ノートブック四拾冊 長崎 尙次郎君
筆筒拾五本 水野 政介君

崇廣會寄附

金壹圓 野洲郡中洲村字吉川、吉川治郎左衛門君

寄贈雜誌

知道第四號
樹心會雜誌第二號
華陽廿一、廿二、廿三、廿四號
嬌々會雜誌
遊方會雜誌六、七、八號
學友會雜誌第六號
保惠會雜誌第七十一、七十二號
京華校友會雜誌第七號
山本小學校同窓會々々誌第十六號
山本小學校同窓會々々誌第十號
和周會雜誌第十號
學友會誌第一集
茨木縣水戸中學校知道會
眞宗京都中學樹心會
岐阜縣岐阜中學華陽會
久留米明善校嬌々會
新瀉縣中學校遊方會
奈良縣郡山中學校學友會
愛媛縣松山中學校保惠會
京華中學校友會
山本小學校同窓會
三重縣第一中學校和周會
京都府第二中學校學友會

會 告

副部長

今永英足
曾田忠太

同

會 告

◎崇廣會決算報告

明治卅二年度 自卅二年四月至卅三年三月 收支決算報告

○收入の部

前年度の繰越

職員會費

生徒會費

寄附金

計金

○支出の部

水上運動費

陸上運動費

雜誌部支拂

演說部支拂

計金

差引殘金

右之通に候也

◎投稿規則

- 一、投稿ハ學術ノ範圍ニ於テシテ政治的時事論ニ渉ルベカラズ
- 一、投稿ハ本會所定ノ用紙ニ據書ニテ認メ假名ハ平假名ヲ用フベシ
- 一、投稿ニハ各自句點ヲ施スベシサレド圈點ハ一切施スコトヲ禁ズ
- 一、投稿等其篇ヲ異ニスル毎ニ其用紙ヲ改メ題ノ下ニ級組及ビ氏名ヲ明記スベシ
- 一、投稿ハ其長短ヲ問ハズ總テ全篇完備セルモノタルベシ
- 一、投稿ハ其掲否ニ關ラズスベテ之ヲ返戻セズ
- 一、投稿ノ締切期限ハ其都度之ヲ定メテ一般ニ通知スルモノトス

○正誤 本誌前號に掲載したる崇廣會規則中第六條の終りに左の二項を誤脱したり茲より追記して其粗漏を謝す

委員五名 各級ヨリ一名宛選定ス

委員ニ於テ雜誌ノ配布報告等ノ事ニ關スル一切周旋ノ勞ヲ取

ルモノトス

會計一名 會長職員中ヨリ之ヲ任ズ

會計ハ本會ノ記録及ビ會計ヲ司ル



明治二十七年五月三十日內務省許可（非賣品）

明治三十四年三月二十三日印刷

明治三十四年三月二十七日發行

滋賀縣犬上郡彦根町大字中組東
第二十三番屋敷

編輯兼發行人

木川 雅太郎

岐阜縣岐阜市笹土居町四十五番戶

印刷人

安田 豊八

岐阜縣岐阜市笹土居町四十四番戶

印刷所

安田印刷工場

發行所

滋賀縣第一中學校
崇廣會